

天災と人災に追われた子どもたちを、 日本語教育で支援する。

日本ではあまり報じられていないが、タイには紛争地域がある。またインド洋大津波では1万人を超える死傷者を出した。首都バンコクには避難した被災者の子どもたちが暮らしているが、家族を失い、貧しい生活を強いられている子も多い。こうした子どもたちに「日本語教育」を行うため、「災害被災生徒の国際支援研究グループ」ではボランティア教師の派遣と教材づくりを続けている。

災害被害にも負けず、将来のために日本語を学んでいる子どもたちがいる。

タイは全体としては仏教国だが、南部にはイスラム教徒が暮らす。イスラム過激派による内紛が絶えない地域もある。さらに2004年のスマトラ島沖大地震によるインド洋大津波でも多くの人が命を落とした。自然災害や人災

によって、多くの子どもたちが首都バンコクに避難した。

このような子どもたちに日本語教育を行い、自立への選択肢を広げようとするのが、千葉大学教育学部の吉田雅巳教授が代表を務める「災害被災生徒の国際支援研究グループ」の目標である。それはまた小規模のグループに日本語を教える「日本語教育学」の研究にもつながる取り組みだ。

その教育の場となったのは、タイ国立イスラム学校である。仏教徒の学生も3割ほどいて、イスラムの戒律もゆるやかな校風の学校である。日本の中学生と高校生に相当する学年が授業を受けることになった。

アニメやマンガの影響もあって、タイでは日本の人気が高く、2005年の活動開始時点から大人気の授業になった。初年度は教師の派遣、事前調査、カリキュラムの基本開発を行い、翌年度は情報通信技術を活用した遠隔教育の基盤作りを行った。この年AJOSCは助成を行い、その内容は2006年度の報告書で既報した通りである。

そして、2007年度は新しいワークブックの開発に力を入れた。教科書とドリル的なノートがいっしょになった教材である。

この教材の開発に携わった筑波大学大学院人文社会科学科学研究科の吉田陸氏は、ワークブックについて「貧しい人が多いですから、継続的に提供できるものというテーマと、実際に子どもたちが覚えて使うことができるということを念頭に置いて制作しました」と説明してくれた。

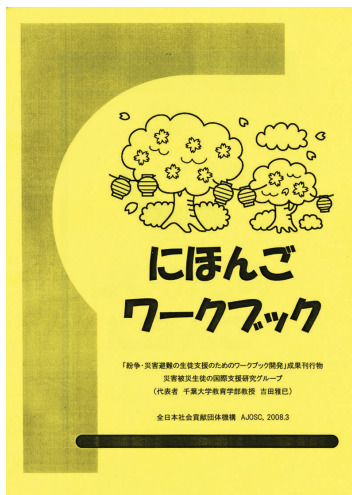
生活を主体において、
実際に使えるワークブックを作成。

では、どのような内容なのかは写真を見ていただきたい。安価という面から、重厚な装丁をしたものではなく、コピーすれば何度も使えるような体裁になっている。家や寄

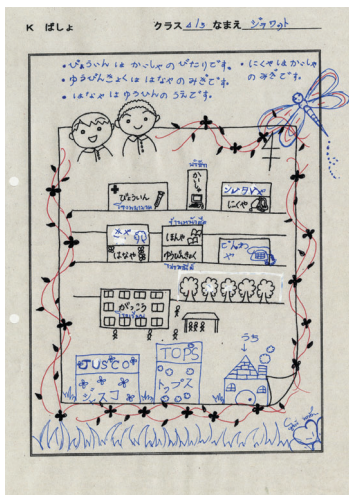


真剣に授業に取り組む生徒たち





今回制作されたワークブック



子どもたちが描いたイラストと日本語
中には漢字まで書ける生徒もいる

宿舎に持ち帰って自習するのにも手軽だ。

テーマは、タイの学習指導要領に添ったものを学習段階にあわせて設定されたが、家族やお店、乗り物など身近なものになっている。

「現地の談話環境にあった教材を初めて開発することに取り組みました。ですから、舞台はタイが中心です」と吉田氏。

絵が多いのは、初級日本語学習者にも興味をもってもらい、イメージを働かせながら日本語を覚えてもらおうという工夫である。いかにもタイらしいのは、例えば乗り物の項目で、ワークブックにはあらかじめ車が書いてあっても、生徒たちが自分で描くイラストは「象」であったりする。お母さんを描けば「ヒジャブ」と呼ばれるずきんが描かれる。確かにタイでの生活を日本人に説明するな

ら、「桜」という単語を覚えるより、これらを基にして日本語を教えるべきだろう。

「コミュニケーションを通して、文法まで指導します。中にはアニメを見て漢字から覚える子もいますが、まったく上達しない子もいます。大切なのはモチベーションを維持させることです。今はどこに次のヒントがあるのかを授業やワークブックを通して探っているところです」

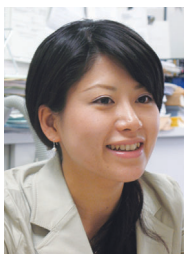
吉田氏の話では、日本語とタイ語では母音が違い、したがって「チ」「ツ」の発音が苦

手なのだそう。津波はスナミになり、チバ公園とシバ公園の区別ができない。文法や発音の違いが学習の障害となるため、今後の研究課題になっている。しかし、概ね子どもたちの意欲は旺盛で、以前行ったアンケートでは、95%以上の生徒が日本語学習が好きだと答えている。日本人と話したい、日系企業に就職したいなど学習の目的意識も高い。

「先日、現地で授業を行う日本人の先生が学校の謝恩会に呼ばれたそうです。よほど親しくて敬意を得なければ呼ばれないものですから、画期的なこと。わずか3年でここまで来られたのかと私も驚きました。ただ、教育はイベントではありませんから、継続が重要です。今後も努力して、他の地域にも広がればと考えています」と吉田教授は夢を語ってくれた。

●担当者より

生徒たちが、日・タイ交流の担い手になる日を夢見て。



私たちの活動は、「自学自習」できる物の提供に主目的があります。しかし海外への援助となると、大学の研究費など公的な資金は使えません。AJOSCさんには2年連続でご助成いただきました。これまで助成金により、遠隔支援、教師教育、教材開発と幅広く助けていただきました。子どもたちに代わってお礼申し上げます。さらには、知見を学術報告として公開し、関連分野の発展に貢献することもできました。いつか日本語を覚えてたくさんのタイっ子たちが日本との国際交流の担い手となります。その日が1日でも早く来るようにこれからも努力していきたいと思ひます。

災害被災生徒の国際支援研究グループ 事務局長 吉田睦氏